

ルイズ・デ・メデイナ報告へのコメント

浅見 雅一

ルイズ・デ・メデイナ師の研究は、主としてローマ・イエズス会文書館が所蔵する「日本・中国部 [Jap. Sin.]」文書をはじめとする良質な史料群を用いて、埋もれた史実を丹念に掘り起こすものである。本報告では、キリシタンとなった琵琶法師を主題としてイエズス会文書から該当記事を文字通り博捜しておられる。

本報告の主題は、周辺分野に様々な形で発展する可能性を秘めている。ここでは、本報告に対して以下の二つの観点から問題を纏めてみたい。ひとつは日本社会との関係であり、もうひとつは教会組織における位置づけである。

先ず、本報告はキリシタン史と日本社会史との接点を探るユニークな研究であると言えよう。日本中世の琵琶を弾く盲法師は、『平家物語』を弾く平曲琵琶法師と『地神経』等を唱えながら籠祓をして廻る盲僧に大別されると言われる。平曲琵琶法師は室町末期には当道(座)に統括されたが、盲僧は各地に分散していたとされるが、両者は時代によって変遷していることもあり、必ずしも明確に判別できるものではないようである。

キリシタンになった琵琶法師は、ヨーロッパ人宣教師の通訳を務めるだけでなく、時には自らも宣教師としてキリスト教の教理を説いていた。本報告からは、こうした琵琶法師が概ね盲僧ではなく平曲琵琶法師に近い性格であったことが窺える。本報告で指摘されているように、一五九五年一〇月二〇日付、長崎発、フロイスの書翰には、琵琶法師の階級を示す記事があり、検校の位を持つ琵琶法師がキリシタンになっていたこ

とが確認される。ロドリゲス・ジランとマテウス・デ・コーロスの記述には、キリシタンとなった琵琶法師がそれを理由に当道から追放されていることが記されているが、これは既に当道が強固な組織として機能していたことを示している。コーロスは、惣検校がキリシタンの琵琶法師から階級を示す刻を剥奪するという興味深い事実を伝えている。兵藤裕己氏は、近世の当道座は中世的座を否定することで盲人支配の一元化と座の集権化を達成したとしておられる。室町末期から江戸初期は、この転換期であったと考えられる。本報告において示された事実から何を読み取ることが可能であるかは、キリシタン史料がキリシタン史の研究ではなく、日本社会史の一端を解明する手掛かりとなり得るかという問題に繋がるであろう。

次に、キリスト教の教えを説いていた琵琶法師には、宣教師として教会内で如何に位置づけられていたかという問題を探り上げたい。イエズス会士ではない日本人が教会内で果たした役割については、既にいくつかの研究がなされている。イエズス会士ではないが教会内で働く者達には、日本語で表記される同宿、小者、看坊と、ポルトガル語で表記されるモツソがある。モツソは、本来は「若者」の意であるが、この場合には教会内の雑用を担う者を示す用語として使用されている。ポルトガル語で表記されていることから分かるように、モツソはインドでも用いられた。

日本の教会組織については、インドの教会組織との比較によって明らかとなった部分も少なくない。ヴァリニャーノは、仏教の位階制がカトリックの組織に類似していることに着目している。日本の教会では通常の教会組織には見られない役割を仏教の位階制に倣って設定しており、教会におけるイエズス会の非会員である同宿、小者、看坊は、いずれも仏教用語に由来する。ロペス・ガイ師は、布教地における職名の転用事

例は珍しいものではないことを指摘しておられる。例えば、インドのカナカブレイは、「書記または秘書」を意味するタミール語である。この役職は、死者の埋葬と緊急の場合の授洗が可能であった。同宿の場合にも、死者の埋葬を司ったことが報告されている。同宿は、本来は「同じ寺院に寓居する僧」の意であるが、キリシタン教会に転用されたものであり、報酬を受けない点が看坊とは異なる。イエズス会では、同宿は非イエズス会員であつても、時としてイルマンとして扱われたことが確認されている。ヴァリニャーノの来日以降は、「説教師の同宿」、「奉仕の同宿」、「セミナリオの同宿」に分類され、能力に応じて役割が明確に区分されている。一五八〇年の協議会では、「説教師の同宿」が明確に規定されているが、小者と看坊には、説教師としての性格はない。琵琶法師は、非イエズス会員でありながら布教活動に従事していたことから、「説教師の同宿」に位置づけることができるであろう。

教会が琵琶法師を撰取したのは、琵琶法師が二つの側面を持っていたからであると考えられる。ひとつは音楽家としての側面であり、もうひとつは聖として、即ち宗教家としての側面である。キリスト教の信者となつた琵琶法師は、琵琶に合わせてキリスト教の教理を謡っている。カトリック教会においては、音楽は典礼の重要な要素のひとつとされているが、その典礼に琵琶法師の謡いが導入されたのである。ヨーロッパ人の宣教師達にとって、琵琶法師が謡う音楽は日本の他の音楽よりも受け入れやすかつたのであろう。キリシタン宣教師達には、日本の音楽は馴染み難いものであつたようであるが、その反面、例えば、フロイスは水夫の音楽が心地よく感じられると記述している。日本イエズス会が出版した『日葡辞書』には、琵琶をヴィオラと説明しているように、琵琶はヨーロッパにも類型の見られる馴染みやすい楽器であつたと考えられる。

教会が琵琶法師という日本社会に存在した職種を取り込んだのは、琵琶法師の持つ聖としての役割に着目したからであると考えられる。盲目という身体的ハンディキャップを持つ琵琶法師は、民衆に対する呪術的影響力を保持していたとされていることから、これをキリシタン布教に転化させたと推測される。平曲琵琶法師の持つ盲僧のような聖としての側面には、平曲琵琶法師と盲僧が完全には分化されていなかったことも関係しているであろう。キリスト教徒の琵琶法師の演題は、キリスト教の教理や聖書の物語であつた。この内、キリスト教の教理は、盲僧が唱えたとされる経典類に通じるのかも知れないが、聖書の物語は『平家物語』に近いものである。それは、教会が琵琶法師の聖としての側面を撰取したことを示すものである。

一方、琵琶法師としては、宿神としてキリスト教を受け入れたのであり、琵琶法師の側にも信仰を受け入れる素地があつたと考えられる。当道を追放されながらも信仰を棄てなかつたのは、イエズス会が布教成果を誇示するためであつたという以上に琵琶法師の側にも、宿神としての信仰が備わっていたからであろう。琵琶法師は、キリスト教を自分達が従来抱いていた宿神として受け入れたことが考えられる。琵琶法師の改宗がその他の職種の者達と比較して特殊な事例か否かは、先程とは反対の視点になるが、本報告を受けて琵琶法師それ自体の研究から明らかにされていく部分であるのかも知れない。つまり、キリシタン史料が日本社会史の研究に、日本社会史の研究がキリシタン史の研究に、相互に如何なる形で貢献し得るか、本報告を受けて考えることが必要なのではないかと思われる。

参考文献

- 中山太郎『日本盲人史』正・続(昭和書房、一九三四・三六年、パルトス社、一九八五年)
- 加藤康昭『日本盲人社会史研究』(未来社、一九七四年)
- 岩橋小弥太『芸能史叢説』(吉川弘文館、一九七五年)
- 兵藤裕己『平家物語の歴史と芸能』(吉川弘文館、二〇〇〇年)
- Jesús López Gay, S. J., "Las organizaciones de laicos en el apostolado de la primitiva misión del Japón", *Archivum Historicum Societatis Iesu*, vol. XXXVI, 1967. (邦訳)ロベス・ガイ(井手勝美訳)『キリシタン史上の信徒徒職組織』(『キリシタン研究』第一三輯、一九七〇年)
- 柳田利夫『キリシタン教会内の非会員日本人』I・II(『史学』第四八巻、第四号、第四九巻、第一号、一九七八年)
- 五野井隆史『徳川初期キリシタン史研究』(吉川弘文館、一九八三年)
- 岸野久『ザビエルと日本——キリシタン開教期の研究——』(吉川弘文館、一九九八年)

質議応答

黒田日出男(東京大学史料編纂所)

本報告のテーマについては、本来ならば日本文学の研究者からの意見が望まれるところである。私が認識している限りでは、日本文学等の研究でキリシタン史料を利用したものは見当たらない。その意味で、本報告は極めて貴重な研究であると言いうことができる。

私は中世の身分制の問題を考える際、最底辺に存在するレブラ病(ハンセン氏病)患者へのキリスト教布教のあり方に関心を持っている。本報告は、音楽史だけでなく、舞台史や演劇史の観点からも議論可能な問題であろう。舞台史や演劇史をキリスト教布教との関わりから研究する視点で、本報告によって提示されたと言いうことができる。キリスト教の舞台劇は、日本のものに準えると、どの様に捉えられたかという問題がある。例えば、日本で言うなら、神楽なのか、能・狂言なのかということである。史料は残っていないということであるが、まだ研究の余地はあると思う。

琵琶法師について、二つの研究を紹介したい。東京学芸大学の石井正己氏の『絵と語りから物語を読む』は、平安時代から江戸時代に亘る琵琶法師のイメージを研究したものである。成城大学の兵藤裕己氏は九州の琵琶法師について精力的に研究を進めて、『平家物語の歴史と芸能』を出版した。兵藤氏は、九州の盲僧のべ一〇〇人から聞き取り調査を行なっている。そうしたものに本報告が繋がっていけば、大変意味のある研究となるであろう。

ルイズ・デ・メディナ

私は琵琶法師それ自体については余り知らないが、先年ローマで琵琶法師の演奏を観る機会があり、興味深く見る事ができた。御教示に深

く感謝したい。

奈倉哲三（跡見学園女子大学）

真宗の中での仏教音楽では、多種の楽師が活動している。中世末から近世にかけて音楽で民衆に信仰を伝えたものには、ささら乞食の説教節などがある。これには、仏教的要素が認められる。こうした音楽的要素を持った芸能者が数ある中で、なぜキリスト教布教に琵琶法師が選ばれたのか問題となるであろう。琵琶法師が多いとしたら、それは宗教性が薄かったからであろう。

菊地大樹（東京大学史料編纂所）

コメントでは、琵琶法師がキリスト教を宿神として受け入れたと述べたが、琵琶法師が当道座の組織化から逃れようという意向でキリスト教に接近した面も考えられるのではないかと思う。そうしたものからキリスト教の信仰に入ったとしても、殉教するのは「宿神」信仰としては余りにも深いものがある。琵琶法師はキリスト教を深く理解したと思われるが、実際にそうだったのであろうか？ また、琵琶法師が早くキリスト教を理解したのは、中世日本に存在した神仏のために命を棄てるという考え方が助けたように感じられる。

浅見

琵琶法師の側が、キリスト教を受け入れる何らかの要素を備えていたからキリスト教を吸収できたのだろうという推測を述べたのである。その要素は、複数である可能性を何ら否定するものではない。私は、その一つとして「宿神」を想定したのである。また、当道座の組織の問題とするのも可能性の域を出ないのではないかと思われる。当道座の組織としても、当時は転換点に差し掛かっており、その一端がキリシタン史料に表れたのではないかと考えられる。

ルイズ・デ・メデイナ

教会は音楽を重視していたが、それだけでなく日本の文学も尊重していた。例えば、セミノリオでは、『平家物語』が教えられていた。イエズス会は、他にも日本にあったものを採り入れて布教に利用するという方針であった。毎日の生活にも日本の伝統を活かしていたのである。琵琶法師は、その意味から教会の制度に取り入れられたのである。

菊地

民間布教のあり方は、一般に史料に遺らない傾向がある。本報告は琵琶法師をヨーロッパの辻音楽師と重ね合わせているように思われるが、ヨーロッパでは辻音楽師が民間においてキリスト教の布教活動に従事していたということがあるのか？

ルイズ・デ・メデイナ

本報告では触れることができなかったが、楽師が布教に従事したのは、日本だけの現象ではない。形態は若干異なるが、同様の事例はヨーロッパにも存在する。これは、人間における普遍的現象なのである。日本とヨーロッパでは、方法は異なるが目的は同じである。但し、ヨーロッパ、特にスペインでは、教会の「内」と「外」の宗教音楽は明確に区別されている。

〔附記〕二〇〇〇年四月二五日、ホアン・ルイズ・デ・メデイナ司祭は、ローマにおいて急逝されました。謹んで御冥福をお祈り致します。